

## *Dākinīvajrapañjara* の文献学的研究

大正大学大学院仏教学研究科仏教学専攻 研究生

学籍番号 1507508

横山裕明

本論文は、インド後期密教タントラの1つである *Dākinīvajrapañjara* (略号 VP) を取り上げたものである。まずは、VP および関連文献について簡単に説明したい。インド後期密教を代表的するタントラの1つに、一般的にヘーヴァジュラタントラと呼ばれている *Dvikalpa* (略号 DK) が知られている。この DK は、三十儀軌乃至三十二儀軌からなるとされる真偽不明の広本 *Hevajratantra* (略号 HV) の最初の二儀軌であるとされている。しかし、HV は現在のところ存在を証明する明確な証拠が確認できていない。そこで、HV を解明する上で最も重要な鍵となるのが本論文で取り上げる VP である。

VP は、HV を一儀軌に要略した略タントラ、あるいは DK の釈タントラとしてインドおよびチベットで重要視されてきた文献である。実際に、VP 本文には HV の全体像として HV の五十万頌の内訳や三十儀軌の各儀軌名が述べられている。また、VP は、ヨーガ理論の説明やタントラ分類法といったインド密教の概論的な側面も有しており、後代の典籍に多く引用されている。このように、VP は HV および DK との密接な関係が言及されているだけに留まらず、独立したタントラとしても非常に重要な位置を占める文献である。したがって、VP の研究は、インド後期密教を解明する上で高い文献学的な価値があるといえる。本論文は、これまで十分に解明されていなかった VP の全体像に触れ、註釈書や周辺典籍を交えながら VP を読み解くことにより、インド後期密教研究の発展に寄与することを目的としている。

さて、本論文は、目次・略号一覧・凡例・校訂方針・参考文献一覧・付録・補足資料を除いた本論部分が以下のような構成になっている。なお、文書形態および書式は和文の横書き、字詰めは40字×40行、脚註は各章末に付随している。

### 第1章 序論

- 1-1. 研究背景
- 1-2. VP および VP 註釈書の基本資料
- 1-3. 研究史
- 1-4. 研究目的と研究方法

### 第2章 VP の概要

- 2-1. はじめに
- 2-2. VP の題名について
  - 2-2-1. 校合テキストと Ph の標題部分の比較
  - 2-2-2. 校合テキストと Ph の奥書の比較

- 2-3. VP の章構成と梗概
- 2-4. 五仏の異名
- 2-5. VP を特徴付ける内容
  - 2-5-1. 後期密教系灌頂
  - 2-5-2. 五相
  - 2-5-3. 十忿怒尊

#### 2-6. まとめ

### 第3章 VP Ch. I の文献学的研究

- 3-1. はじめに
- 3-2. 序文について
- 3-3. VP の5つのマンダラについて
- 3-4. ヨーガの理論
- 3-5. まとめ

### 第4章 VP 所説の HV 像から見る HV の原初的形態

- 4-1. はじめに
- 4-2. VP に説かれる HV の位置
  - 4-2-1. VP に説かれるタントラ階梯の分類法
  - 4-2-2. VP のタントラ分類法における HV の位置付け
- 4-3. HV 五十万頌の内訳について
- 4-4. HV 三十儀軌の各儀軌名について
- 4-5. まとめ

### 第5章 結論

第1章では、VP に関する先行研究を踏まえて、本論文で取り扱う基本資料を整理・選定している。まず、VP は、Skt 写本が散逸しており、漢訳が確認されていないため、Tib に頼らざるを得ない。この Tib は、デルゲ版や北京版に見られる *Gayadhara* と *Shā kya ye shes* の共訳が知られているが、その異訳とされる翻訳者不明のプタク写本 (略号 Ph) が存在する。そこで、本論文では、VP の基本資料として、これら2種類の Tib を比較使用している。なお、*Gayadhara* と *Shā kya ye shes* の共訳の方は、デルゲ版を底本とし、北京版・チョーネ版・ナルタン版・ラサ版・トクパレス版の六種類の版本と、河口写本・シェルカル写本の二種類の写本という計八種類の Tib 諸版・諸写本を用いて校合テキストを作成した。また、Ph の方は、誤写や逸脱・誤入が散見されるため、前後の文脈や校合テキストから本来の形を推定して Ph の校訂テキストを作成した。両翻訳の校訂テキストの作成および比較研究は、先行研究にはない新たな試みである。なお、VP の Ph は、他版の異訳が掲載されているにも関わらず、VP の前後の写本である DK と *Samputodbhavatantra* (略号 SPU) には他版と同じ *Gayadhara* と *Shā kya ye shes* の共訳が掲載されていた。おそらく、Ph の編纂時に既訳の VP が散逸していた等の理由があり、Ph では VP の Skt 写本から新たに翻訳したものを収録せざるを得なかったといった背景があったと考えられる。次に、VP の註釈書は、Indrabhūti の *Pañjikā* (略号『Indrabhūti 註』)、Kṛṣṇa の *Mukhabandha* (略号『Kṛṣṇa 註』)、Mahāmati の *Tattvaviśadā* あるいは *Tattvapauṣṭika* と呼ばれる註釈書(略号『Mahāmati

註』), 著者不明の *Tippati* (略号 *VPT*) という計 4 本の註釈書が知られている。本論文では、これらの中で *Skt* 写本が完本で現存する *VPT* を主に使用し、さらに *Skt* 写本が部分的に現存する『*Mahāmati* 註』も確認できる範囲で使用している。なお、*Skt* 写本が確認できない『*Indrabhūti* 註』・『*Kṛṣṇa* 註』については、*Skt* 註釈の補助的に内容を取り上げて使用している。

第 2 章では、*VP* の全体像を明らかにしている。まず、2-2 では、*VP* の正式な題名について校合テキストと *Ph* の標題部分と奥書を比較させて検討している。両翻訳の題名には若干の相違が確認されたが、書写者や編纂者による誤謬であるとの結論に至った。また、2-3 では、*VP* 全 15 章の各章題を頼りに各章の主要な内容を取り上げて、校合テキストと *Ph* を比較させながら *VP* 全体の梗概を示している。*VP* は、多くのタントラと同様に各章が強い独立性を有しており、さらに同じ章の中でも統一性に乏しい雑多な内容を説いていることが分かった。なお、両翻訳の *VP* 全体の比較によって、校合テキストと *Ph* の間には大幅な増広や内容的な隔たりといった格差が認められないことが分かった。今後も細かい部分での比較研究は引き続き必要ではあるが、それぞれの元になった *Skt* 写本は、全体で見るとほぼ同じ形であったと判断できる。そして、2-4 では、*VP* 全体で使用される五仏の異名に関する記述を取り上げている。ただし、これは全体から見ると異名のほんの一部に過ぎない。*VP* の中心的な尊格となる五仏は、一連の文章の中でも頻繁に異なる名称で説かれている。おそらく、非器の者を退ける密意語として、あえて異名を多用することで難解にしていると考えられる。そのため、そもそも尊格名として捉えること自体が困難な異名も多く見受けられる。そこで、仏ごとに項目を設けて校合テキストと *Ph* を比較検証し、五仏の異名に関する記述を整理した。これらの異名は、*VP* 全体に通じるものであり、*VP* の真意を理解する足がかりとして次章から適宜活用している。2-5 では、*VP* の後期密教系灌頂・五相・十忿怒尊を取り上げ、*VP* の特徴を端的に示している。

第 3 章では、*VP* の導入部分に相当する *VP Ch. I* を取り上げている。*VP Ch. I* は、*VP Ch. II* 以降の実践的な内容を読み進めていく上で最も重要な指針となる内容を有している。なお、*VP Ch. I* には、章題を除いた文に I-1 から I-38 までの番号を振り分けた。これは *VP* が偈を中心に構成しながらも散文が混在しているため、筆者が独自に振り分けた便宜上の文番号である。本章ではこの数字を読解の単位として取り上げて考察を加えている。また、この *VP Ch. I* は、内容ごとに大別すると以下の表のような構成になっている。

文番号	内容	本論文の節番号
VP Ch. I-1 から I-9	序文	3-2.
VP Ch. I-10 から I-29	5つのマンダラ	3-3.
VP Ch. I-30-から I-38	ヨーガの理論	3-4.

「序文」では、まず *VP* の主尊・ダーキニーヴァジュラパンジャラがいかに強力な力を持った尊格であるかが誇示されている。そして、そのような強力な力を持つダーキニーヴァジュラパンジャラが5つのマンダラを説くことで、マンダラを構成する諸尊の権威付けがなされている。「5つのマンダラ」では、それぞれのマンダラの構成と五仏の役割を示し

ている。人間存在の根本的な活力にもなる瞋恚・愚癡・慢・貧欲・慳貪という煩惱を五仏に割り当て、各煩惱がさらに強力な五仏の煩惱によって破壊されることが述べられている。これら人間存在の根本的な活力である煩惱は、活性化することによって打ち克つことが可能であり、煩惱を鎮めることに苦戦する他の乗よりもこの方法が優れていることを訴えている。「ヨーガの理論」では、5つのマンダラの五仏と同一となるために必要なヨーガの理論が明かされている。あらゆるものの本質が空であることはヨーガの前提条件として認めているが、それだけでは仏位を獲得することはできないとしている。最終的にはマンダラ輪に入るヨーガによってのみ仏位の獲得が可能であり、ヨーガタントラの絶対的優位性を説いている。なお、VP Ch. Iの章題は、校合テキストも Ph も共に「あらゆるものの中の最勝なものに衆生を入れる」という内容である。VP Ch. Iの全体的な内容から考えると、「最勝なもの」とは VP であり、かつ VP に説かれたマンダラのことと考えられる。したがって、章題には「VP および VP のマンダラの中に衆生を入れる」といった意味が当て嵌まる。この VP Ch. Iは、衆生を VP に取り込むことを最大の目的としており、まさに VP 全体の導入的役割を担う極めて重要な章であることが文献の比較によって明らかとなった。また、Skt 註釈書や平行文によって、VP の Skt を一部回収し、Skt 偈として復元を試みている。なお、著者不明である VPT では、唯識思想の用語による註釈が散見された。おそらく、VPT の著者は、唯識思想に傾倒した人物であると考えられる。そして、『Mahāmati 註』では、VP の各語にナイラートミヤール十五尊マンダラおよび五部マンダラの尊格たちを当て嵌めていた。さらに、DK における各尊の本質を説明に加えていることから、『Mahāmati 註』は DK からの影響を多分に受けた註釈書であることが明らかとなった。

第4章では、VP の記述に基づいて HV がいかなる存在であったのかを検証した。まず、VP における HV の位置付けを明らかにするために、VP のタントラ分類法を取り上げた。VP のタントラ分類法は、Abhayākara Gupta によって引用されているために有名であるが、これは一部を改変して引用されたものであることが分かった。そのため、VP のタントラ分類法は、現在知られている五分類法ではなく、実際にはタントラ四分類法であった可能性を指摘した。そして、VP によれば、HV は当初、中心的役割が男尊であるヨーガタントラとして説かれ、後に中心的役割が女尊であるヨーギニータントラへと転換していたことが分かった。HV が当初ヨーガタントラであったとされていることを踏まえて HV 三十儀軌の内訳と五十万頌の各儀軌名を考察してみると、そこに登場する尊格名にヨーギニータントラ独自の尊格が皆無であることが分かった。尊格たちの中にはヨーガタントラ以前から説かれていたヒンドゥー系の尊格も含まれているが、それらも含めて全てヨーガタントラの中に見い出すことができる。もし、VP が HV を作成するための草案を整理したものであるならば、HV の内容や儀軌名には、既に VP に説かれている全女尊マンダラの女尊たちが盛り込まれて然るべきである。したがって、VP が示す HV の全体像は、新しく HV を作成するための草案ではなく、VP 編纂以前にヨーガタントラとして存在していた HV の原初的形態を示していると考えるのが妥当との結論に至った。

第5章では、全体のまとめとして、本論文から推測される VP と DK および HV との関係性について言及した。まず、HV がヨーガタントラからヨーギニータントラへと転換したとする記述から、HV にはヨーガタントラという権威の後ろ盾が必要であったという当時の事情を推測した。しかし、DK に比べるとヨーガタントラの要素が多い VP の成立は、

DK の成立よりも時代が遡るかといえ、そう断言できるわけではない。本論文の研究も含めて、これまでに分かっている VP と DK の共通項および先後関係に関わる相違点を整理すると以下ようになる。

・ VP と DK の共通項と先後関係に関わる相違点

共通項		
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ VP で説かれる HV 三十儀軌の最初の二儀軌と DK の二儀軌が同じ名称。</li> <li>・ VP のナイラートミヤー十五尊マンダラは DK にも全く同じ形が説かれている。</li> <li>・ VP のへールカ族マンダラと DK のへーヴァジュラ九尊マンダラは同じ眷属で構成されている。(そのマンダラの四仏の位置にガウリーなどの四女尊, 上下にケーチャリーとブーチャリーを加えると, 上記のナイラートミヤー十五尊の眷属となる)</li> <li>・ HV 五十万頌の内訳および三十儀軌の儀軌名に登場する五仏以外の尊格の中で, ナイラートミヤー・クルクッラー・ヴァジュラヴァーラーヒー・ターラーは, DK にも確認できる。</li> </ul>		
先後関係に関わる相違点		
VP	ヨーガタントラ的特徴	DK
○説かれる	十忿怒尊	×説かれない
VP	ヨーギニータントラ的特徴	DK
×説かれない	第四灌頂	○説かれる
×説かれない	タントラの身体論	○説かれる
その他		
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 五相は VP と DK で全く異なる相を示している。</li> <li>・ 両タントラを相互に結びつける引用文や平行文は確認できない。</li> <li>・ HV 五十万頌の内訳および三十儀軌の儀軌名に登場する十忿怒尊以外の尊格の中で, ブータダーマラとサラスヴァティー(Ph プラティサラー)は, DK には確認できない。</li> </ul>		

以上のように、VP と DK を比較すると、両タントラは共通してヨーギニータントラの特徴である全女尊で構成されたナイラートミヤー十五尊マンダラを説いている。また、へールカあるいはへーヴァジュラを中心とする九尊マンダラも共通の眷属で構成されている。しかし、VP には第四灌頂もタントラの身体論も説かれていないため、DK に比べるとヨーギニータントラ的特徴に乏しい。一方で、VP にはヨーガタントラの特徴であるはずの十忿怒尊が説かれている。さらに、VP と DK では五相が全く異なっている。これらのことを踏まえて考察すると、VP と DK は異なる系統に属するタントラといえ、両タントラのどちらか一方がもう一方を踏襲して成立したわけではないと結論付けられる。したがって、先行研究において、マンダラの観点と新思想体系の有無だけで VP と DK の先後関係が決定付けられてきたことには問題があるといえる。なお、系統の異なるタントラが同一のマンダラを有していることは非常に興味深く、VP と DK の比較が系統を分類する上での貴重な資料となることは間違いない。そして、VP と DK の共通項は、何らかの形で存在していた HV から影響を受けたものである可能性があり、HV 実在の傍証になり得る。